

暑い毎日ですが、いかがお過ごしでしょうか？

今回の「じんけん通信」は、「雑誌 AERA（アエラ）23.5.22 No.23号」の中の、インタビュー記事からです。

これを読んで、皆さんはどのような思いを持たれますか？

～「コーダ」である息子が見つめた母の人生～

責めるべきは社会の側

耳の聴こえない両親のもとで育った「コーダ」である男性が、母の人生をまとめた。周囲の反対のなか、出産を諦めなかった母が生きてきた世界を、息子はどう見たのか。

「このまま親のことをよく知らないでいたら、すごく後悔すると思ったんです」

先天性のろう者である母親が歩んだ人生をまとめた『聴こえない母に訊きに行く』（柏書房）著者の五十嵐大さん（39）は、執筆のきっかけをそう語る。過去2冊のエッセイでも、元ヤクザの祖父や宗教信者の祖母、耳の聴こえない両親との葛藤など、家族の物語を書いてきた。だが、書くほどにわからないことが増えたという。

「これまでの2冊は、あくまで僕視点で家族の姿を書きました。でも『あの時、母はどういう気持ちだったのだろう』と疑問が湧いてきたんです」

言葉が失われた幼少期

母の人生をちゃんと知りたい — 。改めて、母側から見た世界を描こうとペンをとった。

その人生は、決して楽ではなかった。母の耳が聴こえないとわかった時、祖母は神様に祈り続け、祖父は「治す方法」を探し奔走した。だが、母が生まれた1950年代当時は聴覚障害についての情報は少なく、徒労に終わった。

幼少期の母は、家族と身ぶり手ぶりで意思疎通を図ったが、「言葉」は持たなかった。地元の小学校に上がっても、当然、周囲と会話はできなかった。

「共通言語がない状態ですから、教師が何を話しているかもわからなかったはず。授業なんて理解できなかったでしょう。なかには、母をバカにする子もいたと聞きました。」

中学でろう学校に進学した途端、世界がひらけた。

「聴こえないのは自分だけじゃない。クラスメートに手話を教えてもらい、生まれて初めて友達との“おしゃべり”を楽しんだと、とても嬉しそうに話してくれました」

言語を獲得したことで、勉強の遅れも取り戻すことができた。

「もし小学校からろう学校に通えていれば、母は幼少期のほとんどを言葉が失われた状態で過ごすことはなかったはずです。息子として祖父母の選択を責めたくともありません。しかし、当時は手話をすれば奇異な目で見られ、差別されることも多かった。母だけでなく祖父母もつらかったはず。社会のゆがみのしわよせが家族を苦しめていたんです」

結婚や出産に反対され

ろう学校の高等部に上がると恋人ができ、二人は自然と結婚を望むようになった。だが、耳が聴こえない二人の結婚に、周囲から反対の声も上がった。

母が生まれ育った宮城県では、旧優生保護法のもと、1970年代初頭まで障害者への強制不妊手術が実施されていたという。

祖母には「結婚するなら、耳の聴こえる人にしなさい」と言われ、周りからは「聴こえない子どもが生まれたらどうするの?」と訊かれることもあった。

父の姉は、「子どもができたら、私が代わりに育てる」と言った。

それは「善意」や「心配」からくるものだったかもしれない。だが、二人はそうした言葉に真っ向から抵抗した。好きな人と結婚し、子どもを産み、自分たちで育てると決めていたのだ。

「母が諦めず、結婚後数年してようやく許されて生まれたのが僕です。僕は生まれていなくてもおかしくなかった」

命の選択は、優生保護法がなくなった今も形を変えて続く。

「現在では遺伝子検査も発達しています。妊娠中に検査をして、何か問題があるとわかったとき、産まない選択をする女性を誰も責められない。むしろ責めるべきは、障害や病気がある人に対して偏見や差別がなくなる社会ではないでしょうか」

大好きな母を“恥ずかしい”と思うようになったのは、五十嵐さんが小学校3年生の時。家に遊びにきた同級生に「おまえの母ちゃんのしゃべり方は変だ」と言われ、ショックと同時に、母を責める気持ちが生まれた。

「差別は、無知からくるもの。自分の発言や行動が間違っていたと気づいたら、そこから学んで、自分を修正していく過程が大切なのだと思います」

寛容さがある場所にこそ、新しい命が育まれる。家族の物語を書き続けることで、著者は静かに社会に訴え続ける。

フリーライター 玉居子泰子

いがらし・だい / 1983年、宮城県生まれ。著書に「しくじり家族」「ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと」他